

ワークショップ 人生紙芝居

KAMISHIBAI

- 第3期 -

レポート

やってみたい！ と現場では大いに賛同される人生紙芝居ですが、ストーリーが難しそう…絵が描けない…と二の足を踏んでいる人が多いのも事実。それではと、発案者の奥田真美さんとブリコラージュがタッグを組んで 2020 年からワークショップを開催しています。第3期が9月に無事終了しました。

今回参加者は5人。大きな特徴は、そのうちの4人が身内の方の紙芝居を制作したこと。講師の奥田真美さんにも初めての経験でした。終了後のアンケートから3期の様子をお伝えします。参加者の作品もチラ見で紹介！

人生紙芝居

●奥田真美

とは何か

目の前のお年寄りの人生を聴き取り、それを基にストーリーを考え、10枚程の紙芝居に仕立てる「人生紙芝居」。私はデザイナーの現場で利用者の人生紙芝居を制作してきました。キャッチコピーは「人生かみしばいで、人生かみしめ合い」。

紙芝居の制作過程にこそ意義があります。色塗り作業などを周りのお年寄りや職員に手伝ってもらうなかで、主人公となる方の80年90年という人生の来し方を皆が理解し、認め合う関係が生まれます。最初に行う聴き取り作業では、本人が人生を振り返り語るなかで、仕事に打ち込んでいた自分、家族のために一生懸命がんばっていた自分を思い出し、自己肯定感がアップします。

本人が回想を通して生きる力を取り戻し、かつ、本人が属する集団の認め合う力を最大限に引き出す、ということが、人生紙芝居を制作していく過程で、自然と達成される仕掛けになっています。

ケアは「聴く」こと、相手の人生を知ること、なのです。

Q1

人生紙芝居づくりを通して、本人、家族、周りの利用者、上司、同僚等の間で変化がありましたか？

A

ご本人は紙芝居完成後に入院されたので、紙芝居から絵本をつくって病院に届けました。元々、この方を主人公に選んだのはショートステイとご自宅での暮らしに継続性をもたせたいと思ったからなのですが、施設だけでなく病院でもこの目的が達成できたように感じています。

Q2

人生紙芝居づくりを通して、あなた自身が変わったなと感じるころはありますか？

A

以前からその方の人生の中にケアのヒントがあるのでは？ と思っただけで、お話を聞くことを大切にしていただけですが、今回のワークショップでより謙虚な気持ちで利用者のことを考えるようになりました。具体的には、①安易にストーリーを固めない ②知った気にならない ③たくさんさんの情報から削り出し、人生の核心に迫ります。

また、追体験として、本人・他の利用者として

一緒に施設のベランダで南瓜を育てました。家族を思いながらやさしく南瓜を育てながら、ふと見上げる青空……、より深く本人の人生にふれることができたような気がしました。

A

言葉ですべてを説明するのではなく、心を描く、セリフ回しで感情を描く、そのことに刺激を受けました。私は言葉に頼りがちで、くどく説明をしてしまう傾向があるので、この人生紙芝居づくりを通して介護職としての幅が広がったと感じています。

A

苦手だった父の印象が、がらりと変わりました。父の趣味の多いこと、好きな物にのめり込むこと、音楽・映画・ラジオ好きなど、父親の遺伝子が私の中にかなり入っていること……、大切に育ててもらったことを改めて感じました。「ごめんね、おとうさん」という感じです。

人の見方が変わりました。たとえば、偉人でなくてもどんな人にも深い人生があり、どれも貴重なことだと感じました。人と接するときはできるだけ丁寧にしたいと思いました。

Q3

ワークショップを振り返って

A

とても充実感のある講座でした。今までの受け身の講座とは違い、自分をフル回転させた経験は久しぶりでした。

コロナ感染拡大、親の介護などいろいろな困難が加わり、この3か月は忘れられない思い出になりました。

受講前と受講後では、仕事、親の介護、交友関係で少しずつ違ってきているように思っています。今は何がどう変わっていくのかわかりませんが、その変化を少しずつ感じ取っていきたいと思っています。

介護の仕事について悩んでいたときに、人に大切に接している人たちと出会えたことに感謝しています。ありがとうございます。

A

ふだんの介護を離れ、紙芝居を通してその方の人生をかみしめるツールとしての紙芝居づくり、とてもステキだと思います。施設に来られるときには、どのお年寄りも、いろんなことをあきらめて、入所されてきますから、その方の人生や大事にしてこれたことなど、考える暇なく、日々の業務に追われてしまいます。いろいろ反省

第3期ワークショップの成果

奥田真美

今回は、受講生の大半が「家族に贈る人生紙芝居」を制作されました。亡くなった親を主人公にしたいという方までいて、驚きました。

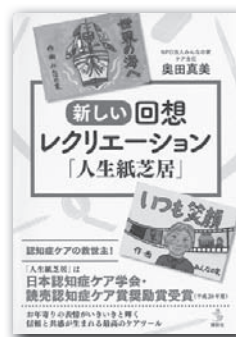
知っているようで、実は詳しくは知らない親の人生。人生の最終章で、自分の人生を受け止めてもらいたい人は、やはり家族だと思います。家族の長い歴史の中で、あるいは、目の前の介護という問題に晒されるなかで、関係が希薄になったり、心がすれ違ったりすることは、珍しくはありません。でも、人生紙芝居がもう一度、家族同士で心を開いて向き合う時間をつくってくれます。

もう一つ大きな成果として、受講生は一人の方を主人公に一作品を制作しただけなのですが、作り終わったときに、「他の人たちにもそれぞれ人生がある。いったいどんな人生を重ねてきた人なのだろう……」という視点を、自然と獲得している点です。この視点を自分のものにできれば、介護の世界は魅力あるものに一変するのです。

VA
定期的には、紙芝居をつくられている奥田さんだからその大切にしたことを教えてもらうことができました。よい時間・企画をありがとうございました。発表会、楽しみにしています。

します。その方にも素晴らしい深く重たい人生があります。そこにもっと敬意をもって関わりたいと思います。

人生紙芝居の具体的な制作工程を
詳しく知りたい方はこちら



新しい回想
レクリエーション
「人生紙芝居」

著者：奥田真美
発行：講談社
定価 1,500円+税

第4期ワークショップのご案内

- ◆日程： ①5月17日(水) ②6月7日(水) ③6月28日(水) ④7月19日(水)
⑤8月9日(水) ⑥8月30日(水)
※間に個別オンライン相談(30分程度)3回
- ◆時間： ①⑥ 19:00～21:00 ②③ 19:00～20:30 ④⑤ 19:00～20:00
- ◆プログラム：人生紙芝居とは何か／候補者選び／聴き取り／ストーリーづくり／下絵を描く／色塗り／発表会
- ◆参加費：6回通して25,000円(プリコ読者15,000円)
※同一事業所であれば複数人で参加いただいてもかまいません。
- ◆申込・問合せ先：プリコラージュ編集部へ E-mail brico@nanasha.co.jp



オンライン発表会

私がつくった人生紙芝居を見てください! 12月16日(金)19:00~20:30

